

---

# パトポケ隊、出勤せよ！

ゆ～すけ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パトポケ隊、出勤せよ！

### 【Nコード】

N7249H

### 【作者名】

ゆゝすけ

### 【あらすじ】

ポケモン達が暮らす世界、平和な世界であったが、文明が発達することにより犯罪が増加、警視庁はこれに迅速に対応するためにパトリックポケモン隊、通称、パトポケ隊を設置しこれに対応した。これはパトポケ隊の奮闘の物語である

## プロローグ（前書き）

ポケモンだけの小説、書いてみました。ACEの方を中心に行きたいので、こちらは超不定期更新です。

## ブローグ

「彼が？」

「そ、アイツだよ」

模擬戦用のフィールドに入ってきた赤色で尻尾で炎が燃えているポケモン、リザードを見ながら、サーナイトが身体じゅうにプロテクトを身につけたポケモン、ドサイドンに尋ねた。それにドサイドンは眠そうな顔をしつつも頷いた。

「でもさ、サーナイト警部補、あんた一つ間違ってるよ」

ドサイドンがさっきと同じく眠そうな顔で言う。それを聞き、サーナイトは驚きを露にした。

「ぐふふふ、今日こそ覚悟してもらおうぞリザード！」

リザードの模擬戦の相手であるハリテヤマが口を開いた。

「へん！あたしを舐めてると痛い目に会っわよ！」

とリザードが顔に合わない高めの声で返した。

「も、もしかして、婦警候補生？」

「そゆこと」

サーナイトの言葉にドサイドンがいつも通りの軽い口調で答えた。

「ドサイドンさんはあんな女の子をパトポケ隊にいれるつもり？」

「あんたも女がてらパトポケ隊の隊長やってらっしゃるじゃない」

「あの子は別よ。若すぎるわ」

「年増ならいいのかねえ」

「お互いに、礼」

そう2匹が会話している間に教官であるハッサムがハリテヤマとリザードに礼をするように促す。

「実戦じゃ相手は礼なんてしてくれないよ」

ドサイドンは呆れたように言う。

「始め！」

「こんのおおお！」

「どすこおおおい！」

合図と同時に2匹は突撃していく。ハリテヤマは強力な張り手を正面に放つ。リザードは笑みを浮かべつつもしゃがんでその攻撃をすり抜けて背後に回った。そしてそのまま背中にて体当たりを浴びせる。張り手を放っていた事で重心が前にいっていたハリテヤマは抵抗する事も無く転倒した。そしてそのままリザードはハリテヤマの右腕を捻りあげた。

「そこまで！」

ハッサムが合図を勝負ありと模擬戦終了のコールを掛ける

「中々やるわねえ」

「でしょお」

外からそれを見ていたサーナイト関心した声をあげ、ドサイドンは同意するように頷いた。

ポケモン、この世界に生活する住人達である。様々な力を持ち、お互いに支えあって生きている。文明や科学技術が発達するにつれて、テロ事件が増加、警視庁はこれに対応するため遊撃隊を設立、パトリールポケモン中隊、通称パトポケの誕生である。

## 集いし問題児達（前書き）

何の因果かパトポケ隊第2小隊に問題児ばかり集まってきた……

## 集いし問題児達

「やっとこれで格好がつかない……」

パトポケ隊の隊長室で本日、第2小隊の隊長になったドサイドン警部補は自分用に特注した椅子に座りつつも言った。

「今日、部下が到着？」

パトポケ隊、第1小隊の隊長、サーナイト警部補が自分のデスクに座ってコーヒーを飲みながらドサイドンに尋ねる。

「うん、研修校にいた連中がものになったらしい。今日のうちに最初に3人、遅れて2人届くらしいよ。」

「小隊編成フォワード3人に、バックアップが3人のは6人編成が原則よ。まさか、うちの隊をあてにしてるんじゃないんでしょうね」

「フル稼働な事件は滅多に起きないよ」

「万が一の時の場合、どうするつもりでいらっしゃるの？」

「僕も入れれば6人だ」

「神風管理職ねえ……」

そんな他愛の無い会話をしながらドサイドンは立ち上がり窓のブラインドから覗く。

「お荷物が到着したみたいだな……」

警視庁のビルの5階にあるパトポケ隊の隊長室からドサイドンは登庁してきた3人、リザード、カメール、ピカチュウを見た。

「僕の部隊が、エリート部隊になるか、はたまた警視庁の愚連隊になっちまうか……楽しみだよ」

ドサイドンは面白そうに笑みを浮かべた。

登庁してきた3人は直ぐ様パトポケ隊の隊長室に向かった。勿論挨拶のためである。挨拶は人としていや、ポケモンとして必要最低限な事だ。それが人の第1印象を決める時だってあるのだ。

「うっ緊張するなあ……」

隊長室の扉の前でリザード巡査は唸り声を上げつつも扉をノックす

る事を躊躇する。今年採用されたばかりの彼女はまだこんな事には慣れていない。初めて配属された部署という事で緊張しているのである。

「んなもん、適当でいいじゃないか」

と隣のカメールがリザードに促した。それに対してリザードはうんと首を捻る。

「イヤ、そりや不味いわよ」

「だったらどおする気だよ？」

リザードとカメールのくだらないケンカが始まった。痴話ケンカって奴だ。ちなみにリザードとカメールは今日が初対面である。早速ケンカとは……若さゆえというか……

「がたがたうるさいぞお前ら！さっさと入るぞ！」

ピカチュウは怒鳴り声を上げ、リザード達を一喝するとドアをノックして中に入った。それにリザード達も嫌そうな顔をしつつもついていった。

「失礼します！本日付けでパトポケ隊、第2小隊に配属する事になりました、ピカチュウ巡査です！よろしくお願いします！」

とピカチュウは隊長室に入るなり敬礼をしつつ言った。

「同じく、リザード巡査です！」

「カメール巡査であります！」

それに続きリザードとカメールが自己紹介をした。

「うん、ご苦労さん。僕が第2小隊の隊長のドサイドン、階級は警部補。まあ、よろしく頼むよ」

とドサイドンが足に水虫の薬を塗りながら言った。

「じゃ、自己紹介はここまでにして……お仕事の方だが……ま、良いことに平和で現在やることが無いんだわ。だからオフィスでゆっくり……」

そこまでドサイドンは言っ言葉を止める。何故か？理由は簡単、サーナイトが鋭い視線でドサイドンを睨みつけたからだ。流石に実質サボるようにと同じ意味の指示するのは不味かったみたいだ。

「という訳にもいかないので、ポジションだけは発表する。リザード巡査！」

「はい！」

「第21（にーいち）隊、フォワードに任命する」

第21隊とは小隊内の部隊の1つである。フォワード、バックスの2人1組で1隊、3隊で1小隊という編成だ。フォワードは相手を抑えるのが仕事、バックスは後方でフォワードへの指示、または地域住民の避難や、後方からの援護射撃などが主な任務である。

「はい！」

ドサイドンの言葉にリザードは力強く頷いた。

「続いてカメール巡査、第21隊、ボックスに任命する」

「はっ！」

「で、カメール巡査、なんでボックスに任命されたか分かるか？」

「リザード巡査より頭がいいからだと思います」

ドサイドンの問いにカメールはさらりと答えた。

「仲良くやろっ」

「どーやって……女にもてないぞアンタ」

カメールはリザードに手を差し出し、リザードはその手を握り返しつつも嫌味のように言う。で、ケンカが始まる訳だが、ここは省略させて頂く、ただサーナイトがこめかみを押さえつつも怒りを我慢していたのを追記しておこう。

「続けてピカチュウ巡査！」

「はっ！」

ピカチュウはさっきまでのリザード達より大きな声で返答する。

「第22（にーにー）隊、フォワードに任命する」

ドサイドンがピカチュウに向かって言った。

「で、さっき言ったように何も知らない訳にはいけないので、2人のフォワードに模擬戦をしてもらう」

「模擬戦ですか？」

「そ、模擬戦」

ドサイドンの言葉にリザードが聞き返し、それにドサイドンはいつも通りに軽く返す。

「それじゃ10分後、模擬戦場集合、以上」

とドサイドンが言う。リザードとピカチュウの模擬戦、どうなる事やら……

## 集いし問題児達（後書き）

キャラクター紹介は全員そろってからで

## 模擬戦（前書き）

久々の更新です

## 模擬戦

模擬戦場ではリザードとピカチュウは向き合っていた。フィールドの真ん中ではカメールが試合の審判を勤めて、ドサイドンは部屋の隅っこでそれを腕組みしながら見ている。

「手加減しないわよピカチュウさん！」

「リザード、女だからって容赦はせんぞ！」

お互いに好き勝手な事を言ってから構えた。その手には専用の警棒が握られている。警棒はパトポケ隊にのみ装備されるもので、自らの護身に用いられたり、容疑者の確保に有効に用いられる。正しい使い方をすれば殺傷力はほとんどなく、それかつ相手の武器などを確実に弾く事が出来る優秀な装備だ。他にもリボルバーや大口径のショットガンが存在するが、これらはよっぽどの事件が無い限り使用される事は無い。それ以前に警棒以外の装備を使用するには各隊の隊長が使用許可の書類を書き、その上課長の印がなければ使用出来ない。

「試合開始！」

審判を勤めるカメールがコールを掛ける。

「先手必勝お！」

先に仕掛けたのはピカチュウだ。電光石化を使い、高速でリザードに向かっていく。リザードはそれに対して警棒を構えたまま動かない。迎え撃つつもりだろうか

「おんがああああ！」

ピカチュウが雄叫びをあげつつも警棒を振る。1回2回3回、しかしその攻撃をリザードは余裕の笑みを浮かべながら避ける。かわすのに必要最低限の動き、全く無駄が無いのだ。

「ぬおおお！10万ボルトオ！」

ピカチュウはそこで10万ボルトを放った。相手に反撃のスキを与えないほど連続攻撃を行う。これがピカチュウの戦闘スタイルだ。10万ボルトはすぐそばにいるリザードに直撃した。しかし！

「残念だったね。ピカチュウさん」

いつものあどけない少女の口調でリザードが言った。リザードは警棒を地面に刺してそれを伝って電撃を地面に流したのだ。これによりダメージはリザードには無い。しかし更にピカチュウは仕掛ける。警棒を地面に刺していて動きを止めているリザードに対してまた警棒を振るおとした。しかし！

「煙幕」

リザードは黒い煙、煙幕を吐いた。煙幕にリザードは包まれてしまい、ピカチュウは完全にリザードを見失ってしまう。

「男らしく無い！正々堂々勝負しろ！」

ピカチュウがそう吠えながらも放電を使った。広域に放たれるこの技なら視界が塞がれようと全く関係ないのだ。

「ピカチュウさん！私は女の子だってば！」

リザードがピカチュウの言葉に対して大声で返した。しかしその声は少し籠っている。

（ん……まさか！）

ピカチュウはその言葉で一つの事を確信した。そして慌てて電光石化を使つて後退しようとする。しかしその時にはもう遅かった。ピカチュウは背後に気配を感じ取る。

「のわっ！」

体を反転させ、その勢いを持ったまま警棒を背後の気配の張本人、リザードに叩きつけようとする。

「甘いよ！」

リザードはその攻撃を一步バックステップを踏んで後退し避けた。

（しまった！）

ピカチュウのその攻撃は失敗だった。大振りになったその攻撃は大きなスキを生じさせた。

「ええーい！」

それに対してリザードは容赦なく警棒を振るった。リザードの振った警棒の一撃によりピカチュウの警棒は弾きとんだ。それに動揺し

たピカチュウの足をリザードは払いピカチュウを転倒させる。そして腹這いにして腕を捻り上げた。

「勝負あり！」

カメールがコールを掛けた。それを聞いたリザードは安心して小さなため息をついてからピカチュウを離れた。

「大丈夫ピカチュウさん？」

リザードはピカチュウに声を掛ける。

「ん？ああ、にしてもやるな……煙幕から穴を掘るを使って背後に回るなんてな」

そう、あの時、穴を掘るを使って放電を避けてピカチュウの背後に回ったのだ。

「運がよかったですって」

リザードは謙遜するように返した。お互いの実力を把握して笑顔で談笑する。そんな時だった！

『ヤマブキシティ、シルフ地区で暴走ポケモン出現！第2小隊出動せよ！繰り返し……』

訓練所に設置されているアナウンスが鳴る。それと同時にリザード、カメール、ピカチュウの顔が引き締まった。

「聞いたな。これよりすぐに第2小隊は出動する。直ちに準備にか

かれ」

「「「了解!」「」」

3人はドサイドンの言葉に敬礼を返してから駆け出した。第2小隊の発仕事、どうなるのだろうか？

初出勤！強盗を捕まえる！（前書き）

久々にパトポケを更新。上手く書けてるか不安です。

初出勤！強盗を捕まえる！

「なんか慌ただしいですよ」

「何かあつたみたいですね！」

遅れて配属された2人、ルカリオとグラエナが慌ただし警視庁所内の様子を見て言った。これに嫌な予感を感じて、2人は歩速を上げて隊長室に向かう。隊長室の扉の前で止まり、ルカリオが一息置いてからノックをして扉を開いた。

「失礼します！本日付けでパトポケ隊第2小隊に配属になりました、ルカリオ巡査であります」

「同じくグラエナ巡査です！よろしくお願いします」

そういうと、慌ただしく出発の準備をしていたドサイドンが初めて2人に気付いた。ドサイドンは軽く笑みを浮かべた後に

「間がいいねえ」

と2人に言った。

ヤマブキシティ東通り

「リザード巡査、俺達の任務は爆走しているシルフ襲撃の犯人、ドンファンの確保だ。ピカチュウ巡査達が先に当たり、それがダメなら俺達つて寸法だ。俺は隊長が本部から送ってくる犯人の現在位置を知らせるから臨機応変に動いてくれ」

「りょくかい」

カメールの言葉にリザードは軽めの口調で答えた。今回の事件は強盗である。シルフカンパニー本社にて今回のターゲット、ドンファンを始めとした強盗グループが強盗を働いたのだ。ドンファン以外は機動隊の突入により全員逮捕されたのだが、ドンファンはパワーを活かして逃走された。で、現在唯一暇をしていて自由に動けるパトポケ隊第2小隊に白羽の矢が立った訳だ。カメールとリザード、二人の顔から緊張が見てとれる。初めての实战だ。緊張しても仕方が無い。

「お、緊張してんのか？」

緊張を誤魔化すようにカメールが得意の軽口をリザードに叩いた。

「当然じゃない。始めてだよ？それにさ……」

「それに？何だよ」

「ドンファンって地面タイプじゃない？結婚前なのに大怪我をしたら大変じゃない」

リザードも同じように軽口を返す。いい感じに緊張も解けていつでも戦える状態だ。

「目標、22隊に後1分で接触します」

二人がしているインカムに本部にいるグラエナが連絡をいれる。それを聞き、二人はまた気を引き締め直した。

「いつでもこーい！」

ピカチュウが警棒片手に大声を上げる。いつでもやれるようだ。

「後15秒！ピカチュウくん、油断はしないでくださいよ。相手は機動隊を振りきるほどの使い手ですよ」

「分かつとる！」

ルカリオが現状の報告、それに警告を行い、ピカチュウはそれに怒鳴り返した。気合いは十分、後は……それが空周りしないだけでいい。

「来ましたよ！」

そうしている間にも転がりながら猛スピードでドンファンが接近して来た。それに対応するようにピカチュウが構えた。

「ぬおおおお！１０万ボルト！」

ピカチュウが素早く放った電撃はドンファンに直撃する。しかしドンファンは止まらない。それを見てピカチュウは間抜けな顔になった。少し驚いているのだろう。それに対して間を入れずにルカリオが叫ぶ。

「何やってんですピカチュウくん！相手は地面タイプですよ！そんな攻撃は効く訳ないじゃないですか！」

「お、おのれ」

ルカリオの言葉を聞き、ピカチュウが唸る。そうしてる間にもドンファンは迫ってきている。ピカチュウは苦し紛れに警棒を投げつけるが見事に弾き飛ばされてしまう。

「この野郎！気合パンチでも喰いやがれ！」

「ピカチュウくん、落ち着いて！」

「邪魔だ！どけ！」

ピカチュウ、ルカリオ、ドンファンが3者3用の声を上げる。ピカチュウの気合パンチは入るのだが、ドンファンの重量と転がるスピードに敵う訳が無くあっけなく弾き飛ばされた。

「ピカチュウくん！」

陰に隠れてパソコンを見て常に入ってくる情報を管理しながら指揮を行なっていたルカリオが飛び出して弾き飛ばされたピカチュウをキャッチした。

「大丈夫ですか！？」

「川の向こうにお花畑が……」

目を回しながらそういうピカチュウ、この様子だと大丈夫そうだ。

「隊長、こちらルカリオ巡查です」

報告を入れようとするルカリオの口は重かった。

「えー！ピカチュウさんやられちゃったの！？」

本部から入った連絡をカメールが受けて、リザードが非難の声を上げる上げても仕方ない事は分かっているのですぐにやめはするのだが……

「後1分後にこちらと接触だ。泣き言を言っている場合じゃないぞ」

そうカメールがリザードを促す。リザードは嫌そうな顔をしたまま道路の中央で構えた片手には警棒、左手にはワイヤーを握っている。

「また警察か。懲りない奴らだ。また撥ね飛ばしてくれろ！」

リザードを発見するや否やドンファンがそう言う。転がる勢いは緩めない。殆どMAXスピードに達しているドンファンを止めるすべは殆ど無い。その中リザードは考える。どうすればいいのか

（正面からいっちゃうと大怪我しちやいそつだなあ……なら……こ  
うだ！）

リザードは口から火の玉を吐いた。鬼火と呼ばれる技で、当たった相手を火傷させる効果がある。それに当たるまいと減速しようとするが、あれだけスピードが出てれば避けるすべは無い。鬼火を受け

て火傷してしまう。

「く……こうなれば死なばもろともだ！」

そう言いながらも転がるスピードを再び上げて、リザード突撃してくる。しかし急激に一度減速した以上、そこまでスピードはあがない。なので余裕を持ってギリギリまで引き付ける

（3、2、1…今だ！）

リザードはスツと右に避けて、仕掛けておいたワイヤーの罠を使う。電柱に巻き付けておいたワイヤーをピンと貼った。すると転がっていたドンファンは勢いよく吹っ飛んで腹を上にして倒れた。

「よし、上手くいった！」

そつりザードは歓喜の声を上げながら、ワイヤーを離して警棒を構え、ドンファンに迫る。ドンファンは起き上がり、リザードを鋭い眼光で睨みつける。相当御立腹の様子だ。

「強盗容疑、並びに公務執行妨害の容疑で身柄を拘束します！」

「黙れ、この坊主があ！」

リザードのセリフがドンファンの怒りに油を注ぐ事となりリザードに向かってくる。しかしそれはドンファンのセリフも同じ事だった。元々が多い、リザードという種族、なので勘違いされる事が多い、それがリザードは……

「あたしは……あたしは女の子だあ！」

大嫌いであつた。キレたりザードの放った特大の一撃、オーバーヒートがドンファンに直撃した。

「があああああ」

その直撃を受けてドンファンは目を回してしまふ。

「人の事を」と間違えるからこうなるのよ……」

そう捨てセリフをリザードは吐いた。

「よし、よくやった。後は俺がモンスターボールで……ん？」

カメールがパソコンを畳んでから路地裏から出てきた。そして甲羅から、犯人逮捕用のモンスターボール（シルフカンパニーが犯人を逮捕するために警察に販売している道具。これに入れば、どんな抵抗をしても意味が無い）を取り出そうとした所に何かに気づく。何かが走つて来ているこれはさっきまでピカチュウがいた方向だ。

「ぬおおおお！」

「あ、ピカチュウさんじゃなか。おゝい」

カメールがそう言って走ってくるピカチュウに手を降る。ピカチュウはそれを無視して倒れているドンファンに迫る。

「俺にも一発、殴らせるお！」

ピカチュウの気合パンチが見事に炸裂した……ドンファンが嫌なう

めき声を上げる……

「アハハハ……今回はあたし達の大勝利かな？」

リザードが苦笑いをしながら言う。彼女の言う通り、初出勤は第2小隊の大勝利で終わった……

初出勤！強盗を捕まえる！（後書き）

次回は……どうしよう……

**警備任務（前編）（前書き）**

久しぶりに更新です

リザード「おそ〜い！今更今年1発目は無いよ！」

ごめんごめん、久しぶりに足りない頭を使ったら苦戦しちゃってね

リザード「ふ〜ん……ではどうぞー！」

## 警備任務（前編）

「演説の警備!？」

そうカメールがドサイドン隊長の言葉に驚きの声を上げた。警備任務、彼等にとっては始めての内容の任務だ。そういう訳で、ドサイドンはリザード、カメール、ピカチュウ、ルカリオ、そしてグラエナの5人が呼び出された。

「確かに警備部の任務ですけど……わざわざ演説一つで、俺達が出る必要は無いでしょう」

そう、カメールが文句を言うように言う。確かに今回の任務は警備部の仕事であり、警備部に所属するパトポケ隊の任務だ。ただ、警備部が出る必要があるかは疑問ではあるが……

「まあ最後まで聞け、演説をするのは誰か知ってるのか？」

そうドサイドンは意味深そうに言う。

「誰です？」

そうルカリオが尋ねる。それに対してドサイドンは……

「なんと、あの有名なスリーパー議員だ」

そう答えた。スリーパー、有名な衆議員である。先進派として有名で、警察予算の軽減や、二ホン在宅の外国人に投票権を与えるなどあまりに先進的な考えの持ち主、いわゆる左翼派である。

「なるほど、それなら納得です」

そうグラエナがいつもの内気な表情で言った。

「えー、なんでよグラちゃん」

そう尋ねるのはリザード、ちなみにグラちゃんとはグラエナの事だ

「おのれは、そんな事も分からんのか」

そうリザードをからかうようにカメールが言う。もうこのパトポケ隊第2小隊では当たり前の光景である。第1小隊の隊長、サーナイトがいればこんな事は無いだろう。だが、生憎現在第1小隊は出勤中なため、サーナイトはいない。それをいいことにやりたい放題だ

「な、なんだよお、カメールは分かるの？」

そう返すリザードは悔しそうな表情だ。

「まあ、普通はな」

そうカメールはいつもの余裕の口調で言う。それに対して再び反論しようとするリザードだったが、途中で口を閉ざす。爆弾が破裂寸前という事に気付いたからだ。カメールもヤバイと悟ったのか、慌て始めるが、その時にはもう遅い、爆弾は爆発していた

「貴様らはやかましいわあ！」

サーナイトがいないと思って油断していた。彼女らのすぐ側にはピ

カチュウという爆弾がいたのだ。このピカチュウ、あまりに短気なため、すぐに爆発してしまう。サーナイトがいないと油断し、完全にピカチュウの事を忘れていた。

「ほらほら、喧嘩しないの。すぐに出動するから、お出かけの準備しなさいよ」

そウドサイドンは気が抜けるような口調で言う。それにピカチュウも気が抜けたのか、怒鳴るのを辞める。それで、全員が気をつけをする。そして

「了解！」

と敬礼をしてから走って出ていった。

「うちの隊長さ、色んな意味で大物だよな」

「同感」

カメールがそう言うのに、リザードは頷いた。どつやらこついつと  
ころでは気が会うみたいだ。

午前11時30分

演説会場

- でさ、結局なんで演説にアタシ達が必要なのさ？ -

そうリザードが自分のインカム越しにカメールに尋ねた。現在すでに、現場に到着している。すでにそれぞれの持ち場について、会場の最中チェック最中だ。ちなみに現在彼女はピカチュウと協力して、会場に不審物が無いかチェックをしている。

「ん、まだ分からないかよ。よくそれで警察官になれたよな」

そう言うカメールは現在、会場の入場者のチェックだ。こういう仕事も重要なパトポケ隊の任務だ。

- 悪かったわね…… -

そうふてくされたように返すも調べる手は止めない、やはりそこら辺はプロである

「そう怒んなよ。スリーパー議員って典型的な左翼派の議員って事は知ってるよな」

- うん、それはね。イロイロ新しい事をやろうとしている人って事もね -

そうカメールの質問にリザードが答える。流石にそこまで世間知らずではないようだ。

「なら話は簡単だ……」

「のう、ここには警察の方がいっぱいおるが、どうしてかのう？」

カメールはリザードに説明しようとするが、途中で老婆のケンタロスが尋ねてくる。カメールはリザードへの返答を一度切って……

「ここで、スリーパー衆議院議員の演説があるんですよ。それで俺達はその警備をしてる訳。ほら、あそこに警察のコンテナがあるでしょ。分かった、おばあちゃん」

そう、カメールは警察が今日の演説での警備を行うために持ってきたと思われるコンテナを指差す。それには大きな文字で警視庁とかがれている。

「ほほお、大変じゃのお。それでは、頑張つての」

「ありがとね、おばあちゃん」

そう言うケンタロスにカメールがそう返した。するとケンタロスはゆっくりと歩いていった。

「どうしたの？」

「ん、ばあさんにさ、話かけられたから答えてたんだよ。それでなんだっけ？」

リザードがほとほりが覚めたのを見計らってそうカメールに再びインカム越しに尋ねる。そう返すカメールの口調はさっきの老婆と話す口調とは打って変わっていつも通りだ

「なんでこんな嚴重警備なのかって話よ。今回は銃の携行も義務付けられてるのよ。尋常じゃないわよ -

そうリザード、銃、ポケモンのタイプのエネルギーをこめられた銃弾を打ち出す、パトポケ隊にのみ装備を許される飛び道具である。貫通力はなく、一点に集中させてダメージを与える。小口径の6発装填のリボルバー式の銃だ。今回はパトポケ隊の使用出来るメンバー全員に携行が義務付けられている。むやみな使用は禁止だが、いざという時は頼りになる、パトポケ隊だけの切り札だ。

「それはな、過激派の右翼の連中が来たときのための装備だな」

そうカメールが言う。右翼派、古きを大切にしようという思想を持った人達だ。ようは左翼派と正反対の思考を持つてるという事、つまりは相いれる事が無い。常に左翼派と対立し続ける人達である

「うーん左翼って……聞いたけどと新しい事やろうとしていい響きなんだけどね。どうして反対するんだろ。それも暴力でさ -

「さあな……でも俺はあんまり左翼がかつてるのは好きじゃないな。例えば今回のスリーパー議員、あれはちょっとやり過ぎだな。警察が最近不祥事が多いからって予算を今より削るのはマズイぜ。それを民間の政策に回すって言うてるけど、そんな事するぐらいなら、個人資産を削ってそれを政策に使えっての。だからどっちかって言えば右翼の意見に賛成だな」

そう愚痴混じりに言う口調はいつも通り適当だ。だが、やっぱり不満を持っているのか、どこか怒気が含まれていた

- でもさ…… -

「お前の言いたい事は分かるさ。暴力はおかしいってんだろ？」

そう言うリザードにカメールはそう返す。

「それは当然さ。俺だって暴力で自分の意見を通そうってのはお門違いだと思う。ようはどっちにしたって行き過ぎは良くないって事だ」

そうカメールは自分の意見を述べる。

- へー、カメールもイロイロ考えてるんだね -

「まあな」

そう言うリザードにカメールはそう返す。

「それじゃそろそろ時間だな。俺も会場の方にそろそろ行くから、そこで待機してろよ」

- ん、了解 -

そうカメールの言葉にリザードが頷いた。

某時刻

某所

「さて、そろそろ始めるかの」

そう言う4足歩行の老婆のポケモン。今、パトポケ隊発足後最も長い一日が始まるうとしていた

警備任務（前編）（後書き）

リザード「……なんか主人公がカメールみたいなんだけど……」

気のせいだって

リザード「にしてもいきなり不穏な空気はやめてよ」

まあ、君の世界はテロ事件が多いから諦めて

リザード「はあ……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7249h/>

---

パトポケ隊、出動せよ！

2010年10月9日20時16分発行